

中学校英語科におけるサービス・ラーニング型 PBL を取り入れた授業開発 — SDGs の実現に貢献するグローバル人材の育成をめざして —

Development of English Lessons Incorporating Project-Based Service Learning in Junior High School: Towards Fostering Glocal Human Resources Who Contribute to the Realization of SDGs

中村早希
Saki NAKAMURA

鳴門教育大学大学院 グローバル教育コース
Global Education Course, Graduate School, Naruto University of Education

要旨

本研究は、子どもたちが予測困難な未来社会を切り拓いていくために必要とされる学習指導要領で示された3つの資質・能力を育成するとともに、ふるさとを愛し、地域社会から世界の持続可能な未来を創造していくことができるグローバル人材の育成を目的とする。これを達成するためには、子どもたちの主体的・対話的で深い学びの実現が求められる。そこで、SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発のための目標) との関連性を考慮したカリキュラム・マネジメントを実践し、英語科に「サービス・ラーニング型 PBL」を取り入れた授業開発を行った。そして、英語科の3つの資質・能力及びグローバル人材としての実践意欲が向上するという成果が得られた。

キーワード：主体的・対話的で深い学び、カリキュラム・マネジメント、SDGs、PBL、サービス・ラーニング

1. 研究目的

筆者は、A 県の中学校英語科教諭として教育に従事している。子どもたちが生きる未来の社会は、より VUCA な時代となることが予測される。VUCA とは、Volatile, Uncertain, Complex, Ambiguous の頭文字をとった言葉であり、より「予測困難で不確実、複雑で曖昧」な時代が到来することを意味している。しかし、どれほど激しく変化する社会の中であっても、子どもたちには、ふるさと A 県を愛し、よりよい地域社会を創るため、ひいては、よりよい世界の未来を創るために主体的に行動できるグローバル人材へと成長してもらいたい。そのためには、中学校英語科においても、学習指導要領で示されている三つの柱で構成された資質・能力である「生きて働く『知識・技能』」、「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』」、そして、「学びを人生や社会に生かそうとする『学び

に向かう力・人間性等』」を育む確かな授業実践が求められる。また、英語科の授業を中心に据え、教科等横断的に地域との連携を図りながら、子どもたち一人一人が地域社会の担い手の一員として、または地球市民の一人として、地域や世界の課題に責任をもって向き合い、自分自身と他者のウェルビーイングの実現に向かって力強く生きていこうとする実践意欲及び態度を育てたいと考え、本研究に着手した。

2. 中学校英語科授業における「主体的・対話的で深い学び」の実現

前述のとおり、子どもたちに予測困難な未来社会を切り拓いていくために必要な3つの資質・能力を育み、地球規模の視野で考えながら地域社会からよりよい未来の創造に寄与するグローバル人材を育成するためには、「主体的・対話的で深い学び」のある英語科の授

業を実現しなければならない。「主体的・対話的で深い学び」とは、中学校学習指導要領解説総則編（2017）によると、次のように示されている。

- ①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。
- ②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。
- ③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

上記の3点は、授業改善の視点でもあり、授業で実現すべき目標でもある。

また、英語科において「主体的・対話的で深い学び」を実現するためには、次の4点を充実させることが求められる（金子・松浦，2017）。

- ①具体的な課題を設定する。
- ②コミュニケーションにおける見方・考え方を働かせる。
- ③コミュニケーションの目的や場面・状況を意識して活動を行う。
- ④英語の「知識及び技能」を実際のコミュニケーションにおいて活用する。

上記の4点すべてが、主体的・対話的で深い学びの実現に不可欠であるが、金子・松浦（2017）は、上記①に記された「具体的な課題設定」の重要性について、「まず、具体的な課題を設定すると、そこでのコミュニケーションの目的や場面・状況を考えることになる。そして、その課題を遂行するのにふさわしい表現や表現形式、文章構成などを考えたり、それを改善したりする際に、コミュニケーションにおける見方・考え方を働かせることになる。そして、このプロセスを通じて習得した『知識及び技能』が活用されることになるためである。」と、言及している。また、金子・松浦（2017）は、「主体的・対話的で深い学びは1単位時間の授業の中で実現を目指すものではなく、実現されるものでもないということである。つまり、1単元を通じた授業やある共通のテーマやトピックを通じた学習、場合

によっては学期や学年など、内容的なある程度のまとまりや長い期間を通して実現が図られるものである。」（P.79）と述べている。そこで、「主体的・対話的で深い学び」のある英語科授業を実現するために、サービス・ラーニング型PBL（Project-based Service Learning）を取り入れ、社会貢献及び他者貢献を目的としたコミュニケーション課題に一定期間取り組むプロジェクト型学習を試みることにした。

3. 理論的背景

3.1. サービス・ラーニング（Service-Learning）とは

サービス・ラーニング（Service-Learning, 以後SLとする。）は、アメリカで発祥した「サービス（社会貢献活動）+ラーニング（学習）」である。倉本哲夫（2008）によると、SLとは、「コミュニティー（Community）における市民性（Citizenship）を育成することを目標論に据え、アカデミックな教科内容・スキルと他者に対するコミュニティー貢献活動とを統合することによって、学校改善を促進させる新たなカリキュラムの開発・経営論」のことである。SLの学習効果には様々な報告があるが、木村・中原（2011）は、「社会を変革し、影響を及ぼすことができるという『社会的有効性意識』の獲得」に効果があり、「積極的に社会を支え、改善する資質を涵養する上で、有効な教育方法の一つである」と示唆している。また、中里・吉村・津曲（2015）は、SLには学習者の成長を促進する働きがあり、「学生の自己効力感や学習意欲の向上、汎用的能力や市民性の獲得を促す効果がある」と言及している。以上の報告から、SLを授業で取り入れることで、次のような学習効果があると考えられる。1点目は、子どもたちが、地域社会貢献活動における課題解決を通して、学校内での学びが現実社会の課題解決に活かせる価値あるものだと認識できることである。この認識によって、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」がより一層促進されるとともに、3つの資質・能力の育成・涵養にもつながると考える。2点目は、学校と地域が連携したSLのカリキュラムを通して、学校教育がよりよい地域社会の形成に貢献することができ、学習指導要領の基本理念である「社会に開かれた教育課程」を実現することができることである。

3.2. プロジェクト型学習（Project Based Learning）とは

プロジェクト型学習（Project Based Learning: PBL）は、現実社会に関わる真正で複雑な疑問や問題に対して、一定の時間をかけて取り組み探究をしていくことで、知識やスキルを習得し課題を発見・解決していく

学習方法である (BIE,2015)。

溝上・成田 (2016) は、上述の PBL の具体的な学習のステップとして、「①プロジェクトテーマの設定、②解決すべき問題や問い・仮説を立てる③先行研究のレビュー④必要な知識や情報、データの収集、⑤結果と考察、⑥成果物として仕上げる」の 6 段階を示している。この学習過程を通して、「学生の自己主導型の学習デザイン、教師のファシリテーション」のもと、「問題や問い、仮説などの立て方、問題解決に関する思考力や協働学習等の能力や態度を身に付ける」(P.11) ことができると言及している。つまり、子どもたち主体でプロジェクトが立案、実行される過程で、課題解決のために級友や教師、現実社会で関わる人々等と協働することができ、主体的・対話的な学びが生まれるということである。また、子どもたちが各教科等で身に付けた「知識及び技能」を活用し、プロジェクトを成し遂げることで、「思考力・判断力・表現力等」及び「学びに向かう力・人間性等」を育成することもできる。加えて、PBL の学習過程は、学習指導要領において「深い学び」を保障するために重視されている「習得・活用・探究」という学びの過程と整合性がある。よって、PBL は、子どもたちの主体的・対話的で深い学びを促進し、3つの資質・能力の育成・涵養に効果がある学習方法であると捉えることができる。

3.3. サービス・ラーニング型 PBL を取り入れた英語科授業とカリキュラム・マネジメント

サービス・ラーニング型 PBL とは、前述した子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を促進する PBL をベースに、「社会に開かれた教育課程」において、子どもたちの市民性等の育成に有効であると考えられるサービス・ラーニングの地域社会貢献（他者貢献）活動のエッセンスを加えた学習方法であり、学びの視点である。

本稿 2. で述べたとおり、サービス・ラーニング型 PBL を取り入れた英語科の授業では、社会貢献及び他者貢献をコミュニケーション課題に設定し、一定期間のプロジェクトを通して課題解決を図る。そして、この授業を実践するには、「カリキュラム・マネジメント」が必要不可欠である。「カリキュラム・マネジメント」について、中学校学習指導要領解説 総則編 (2017, P.40) では、その定義を下記のように示している。

各学校においては、生徒や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的

な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする。

上記の下線部で示されているように、「生徒や学校、地域の実態を適切に把握」した上で、地域と連携しながら、教育の内容等を「教科等横断的な視点」で組み立てていくことが、カリキュラム・マネジメントの要点となっている。その理由について、中学校学習指導要領解説 総則編 (2017, P.49) では、「変化の激しい社会の中で、主体的に学んで必要な情報を判断し、よりよい人生や社会の在り方を考え、多様な人々と協働しながら問題を発見し解決していくために必要な力を、生徒一人一人に育てていくためには、あらゆる教科等に共通した学習の基盤となる資質・能力や、教科等の学習を通じて身に付けた力を統合的に活用して現代的な諸課題に対応していくための資質・能力を、教育課程全体を見渡して育てていくことが重要となる。」と、解説されている。これを踏まえ、本研究の目的である英語科における 3つの資質・能力及びグローバル人材に求められる実践意欲と態度を育むために、SDGs (持続可能な開発のための目標) との関連性を考慮したカリキュラム・マネジメントを実践する。

4. 中学校英語科におけるサービス・ラーニング型 PBL を取り入れた授業の実践

前任校である C 中学校で、サービス・ラーニング型 PBL を取り入れた授業の実践に取り組んだ。C 中学校は、B 市西部に位置する自然豊かな D 町にある全校生徒 23 名の小規模校である。筆者は、本校で第 2 学年 (6 名) の担任及び総合的な学習の時間、道徳教育の校務分掌を担当した。

4.1. C 中学校第 2 学年における D (町) Pride Project

英語科を中心に、SDGs との関連性を考慮しながら、他教科や総合的な学習の時間、特別の教科道徳等を横断的にカリキュラム・デザインしたサービス・ラーニング型 PBL の総称を D Pride Project と名付け、筆者が担任する第 2 学年の生徒と共に取り組んだ。具体的な D Pride Project の実践として、初めに総合的な学習の時間における学習活動を取り上げ、次に、そこでの学びと他教科等の学びを統合させる英語科の授業について説明する。

4.2. 総合的な学習の時間における D Pride Project

第2学年の総合的な学習の時間の学年テーマは、「ふるさとD町の持続可能な未来について考え、行動しよう」である。このテーマの下、生徒がD町の誇りと考える人・自然・産業の魅力を校外の人々に発信したり、それらの誇りを守っていくためのSDGsのプロジェクトを立案・実行したりする地域社会貢献学習を行った。まず、この学習の導入として、「SDGsとは何か?」や「世界のSDGsの活動」、「A県内のSDGsの活動」について学ぶ授業を行った。その上で、第2学年の生徒6名が、D町で現地調査を行い、課題設定をして次のようなプロジェクトを立案し、実行した。「①D町の美しい山を後世に残すプロジェクト、②D町の美しい川からA県のプラスチックごみ問題の解決に取り組むプロジェクト、③D町のシンボルツリーを守るプロジェクト、④D町のきれいな空気を世界に広げるプロジェクト、⑤自然と共存するD町の人々のライフスタイルを世界に広めるプロジェクト、⑥D町の若者の夢をふるさとで実現させるプロジェクト(地場産業である植木・苗木・造園業の魅力を次世代に伝えるプロジェクト)」以上6つの視点によるサービス・ラーニング型PBLに取り組み、その成果をふるさと学習発表会で披露し、学校・家庭・地域が学びを共有するとともに、三者が協働してD町のSDGsの実現に向けて行動していこうとする意識を高めた。

4.3. 英語科における D Pride Project

～ALT (Assistant Language Teacher) のE先生のふるさとフィリピンのゴミ問題をD町から解決しよう!～

英語科におけるD Pride Projectとして、学年末に、

第2学年で学んだ言語材料や総合的な学習の時間等での学びを教科等横断的に深めることを目的としたサービス・ラーニング型PBLを取り入れた学習を行った。この学習では、私たちと共に英語を学んできたパートナーであるALTのE氏にゲストティーチャーとして課題を提示していただいた。同ALTとは、第1学年の時から互いの母国やふるさとの魅力を紹介し合う活動を継続し、生徒はフィリピンの素晴らしい文化に対して興味・関心を高めている。しかし、今回は、同ALTが今まで触れなかったフィリピンの環境問題や社会問題(SDGsの問題)を提示していただき、その解決策を生徒が考え、提案するという学習に取り組んだ。

4.4. 具体的な学習活動

① 1時間目の内容

E先生がふるさとフィリピンのメトロ・マニラにあるケソン市のゴミ問題やその背景にある社会問題についての2つのプレゼンテーションを行う。生徒は、そのプレゼンテーションを聴き、シンキングツールを活用しながら、ゴミ問題やその背景にある社会問題についての具体的な内容をまとめ、それらの解決のために実現しなければならないSDGsの課題を発見することで、ALTが提示する課題についての理解を深めていく(図1)。また、ALTには、「I think that we Filipinos can learn a lot from the people of D Town. I think that D town's people are doing a wonderful job of keeping their town clean and beautiful. The people of Quezon City want a cleaner city too. Do you have any advice for us? (清潔で美しいD町を守るために素晴らしい取り組みをしているD町の人々

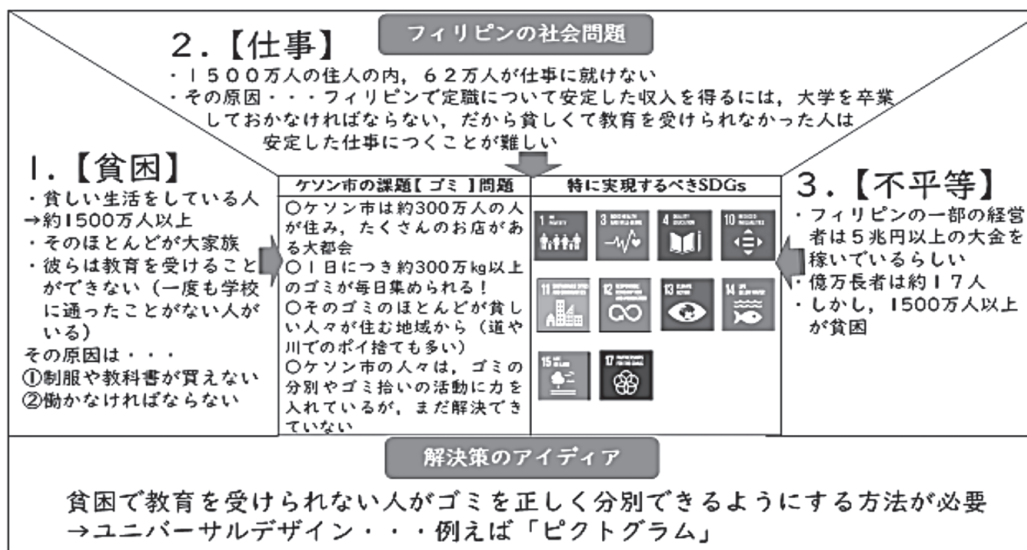


図1. ゴミ問題とその背景にある社会問題についてまとめた生徒のシンキングツール。

出典：著者作成

から、ケソン市を美しい街にするためのアドバイスをいただけませんか？”と生徒に質問していただき、生徒の課題解決に向かう意欲を高める指導とした。

次に、筆者が、ALT が提示したケソン市のゴミ問題の解決策を提案するモデルプレゼンテーションを行った。筆者のふるさと A 県 F 町では、本町のシンボルであるウミガメの上陸数が年々減少している。その原因の 1 つとして、プラスチックゴミによる海洋汚染問題が挙げられる。その問題を解決するべく小中学校や地域住民が取り組んでいる清掃活動をはじめとした SDGs への取り組みを紹介するとともに、筆者のふるさと F 町からの解決策を提案した。生徒は、このモデルプレゼンテーションから、文章構成や内容、プレゼンテーション技法について話し合い、生徒が、本学習活動の最終ゴールの姿を具体的にイメージすることで見通しをもって学習に取り組ませる手立てとした。

② 2～6 時間目の内容

2 時間目は、総合的な学習の時間を挟み、その中で 2 つの活動を行った。1 時間目は、生徒が各自でインターネット等を活用して、ゴミ問題の解決策について調べ、その後、調べた内容を学級全体で共有する活動である。2 時間目は、教師による各国のゴミ問題解決に向けた取り組み（スウェーデンや日本の 3R、サンフランシスコの 4R などの取り組み）についてのプレゼンテーションを聴き、ケソン市のゴミ問題の具体的な解決策について話し合っていく。この話し合いを通して、多くの国々で取り組んでいる 3R (Reduce, Reuse, Recycle) の視点から、解決策を提案していくというアイデアが生徒から提案される。そして、この話し合いを深めていく中で、ゴミ問題を解決するために共通するキーワードに生徒が気づく。それは、ゴミを減量し、再利用し、再資源化していくことは、地球に住む一人一人が果たすべき義務であり、「責任感 = Responsibility」

が共通のキーワードであるということである。そこで、C 中学校 2 年 A 組オリジナルの 4R (Reduce, Reuse, Recycle, Responsibility) を設定し、これら 4 つの視点から、4 人の生徒が分担してプレゼンテーションの原稿作成に取り組むことにした。

3～5 時間目を使って、各自が創造性を発揮して、英語での原稿を作成していく。今まで共に英語を学んできた ALT のふるさとの問題を解決しようと、教科書やインターネット、辞書を活用して粘り強く原稿を作成していく。この段階では、まず、個人で今まで学んだ知識、技能を活用して、思考、判断し、表現していくための時間を大切にしたい。次の段階では、級友と共に内容や英語表現に関する話し合いを行い、助け愛（合い）、学び愛（合い）、高め愛（合い）ながら、協働的に原稿を作成していく。そして、6 時間目のプレゼンテーションの練習では、ペアを組み、互いのプレゼンテーションを鑑賞して、教師が提示したルーブリックの観点に沿った相互評価やピアフィードバックを行い、協働してプレゼンテーションの質をより一層高めていく時間とした。

③ 7 時間目の内容

最後に、ALT の E 先生のふるさとのゴミ問題を解決するためのプレゼンテーションを行うことで、学校における教科等横断的な学びを活用し、他者や地域社会、そして世界の SDGs の実現のために貢献する学習活動につなげた。

5. 成果と課題

5.1. 英語科の 3 つの資質・能力の向上

図 4 は、C 中学校第 2 学年の協働プレゼンテーションの原稿である。これを基に、英語科の 3 つの資質・能力に関する成果と課題を考察する。

The Solution for the Filipino Garbage Problem from D Town

Thank you for your presentation about the Filipino garbage problem and the social problem, Ms. E. Thanks to your presentation, we learned about the Filipino SDGs problem. Today, we're going to make a presentation about "the solution for the Filipino garbage problem from D town." There are roughly 4 categories in our presentation. The four categories mean "4 Rs." Do you know about the 3Rs for garbage problems? The 3Rs mean "Reduce, Reuse and Recycle." But we added one more R. It is "Responsibility." We think that these 4 Rs can solve your hometown's garbage problem.

① First, I'm going to talk about a solution related to one of the 4 Rs, which is "Recycle". I think separating garbage is very important to help solve the Filipino garbage problem. How about making pictograms to make separating garbage easier? Pictograms have three good points. First, because many poor Filipino people cannot get quality education, they cannot read. If pictograms are used, they can understand it easily. Pictures are easier than languages after all. Second, if it's a picture, both old and young people can understand good

pictograms. Third, they are easier to remember. For these points, it is good to use pictograms.

I tried to create my original pictograms to solve your hometown's garbage problem. Look at these pictograms. There are some good points. First, look at the color of each garbage can, it is easier to find burnable or unburnable cans. Second, pictograms are simple, but my pictograms help Filipino people to understand what garbage to throw away. Finally, look at the languages. I tried to use both Filipino and English. Ms. E taught us poor Filipino people can understand Filipino easier than English. So, I used Filipino. But, because a lot of tourists visit the Philippine, I used English for them. I hope my pictograms will help them to separate their garbage.



② Second, I'm going to talk about "Reduce and Reuse". You taught me us there are about 3,151,961 kilograms of garbage collected in Quezon City every day. I think that reusing is important to reduce garbage. The Philippines doesn't have recycling technology, so there is much garbage. I want Filipino people to learn how to reduce garbage and reuse them. For example, at home, we usually give our old clothes instead of throwing them away. Also, our grandmother or grandfather always use garbage to make manure. I think individuals can reduce and reuse garbage.

On the other hand, it's not easier to solve your hometown's garbage problem than Japan's. We knew many poor Filipino people live in garbage mountains. People call them waste pickers. They pick up reusable garbage for a living. But I think living in the garbage mountains is bad for their health. If we can reduce the garbage mountains, we can save the waste pickers' lives. Also, a lot of people in the world are suffering from COVID19. I'm a leader of the health and school lunch students committee. Our committee works on some activities to prevent COVID19. For example, we always disinfect our desks or chairs after school. We also asked students to put their garbage into plastic bags before they put them in the garbage cans. This is to prevent COVID 19. So, I want Filipino people to reduce their garbage, reuse them and be careful when throwing their garbage so that the waste pickers can be protected from COVID19. I tried to create a new pictogram to tell Filipino people how to throw away garbage to prevent COVID19. How about using this?



③ Finally, I'm going to talk about the importance of "Responsibility". As you know, we live in D town in B City. D town is the west of B City. Our town is famous for its beautiful nature. There are beautiful mountains, forests, and rivers. The most famous thing is a big camphor tree. We call it "Okusu." It is about 450 years old. It is 22.7 meters high. It is a very important symbol tree for us. To protect the wonderful tree, we tried an SDG project in our Period for Integrated Study. In this project, first, we asked people in D town about their thoughts about it. They think that Okusu is a treasure for D town, and it is something to tell future generations. Also, they have a lot of good memories with Okusu. When they were small, they enjoyed climbing it with their friends and picking up the acorns. Some of them held each other's hands and stood around the tree to measure it during their elementary school classes. According to their opinions, we understood that D town's people love Okusu and their hometown D town. Also, they have a sense of ownership over their town. They think that D town is "OUR town." So, they take responsibility, and take care of the tree and keep D town clean and beautiful. I want the people of Quezon City to think their city as "OUR city" and take responsibility to protect their hometown's nature and solve their garbage problem.



図4. C 中学校2 学年の協働プレゼンテーションの原稿。出典：著者作成

図4のプレゼンテーションについて、中学校学習指導要領解説 外国語編(2017)の「外国語科の目標及び内容」の「『話すこと[発表]』の(ウ)社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて話すことができるようにする」に焦点を置き、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点により、成果を考察する。まず、「知識・技能」においては、ALTに対して中学校2学年までの既習の語彙や言語材料を上手く活用しながら、提案内容を伝えることができた。また、ALTのプレゼンテーションを基に理解したフィリピンの社会状況を考慮した上で、フィリピンの人々にとって適切な解決策を思考・判断し、表現することができた。そして、生徒がALTの文化背景に対する理解を深めた上で、主体的に英語で発表することができた。加えて、本実践を支えるカリキュラム・マネジメントの有効性も認められた。特に上記提案①では、第2学年の英語科単元“Unit 5 Universal Design (New Horizon English Course 2)”の単元末の学習として、美術科単元の「みんなのためのデザイン(ユニバーサルデザイン)」や「情報を整理して伝える(ピクトグラム)」、そして、人権学習「ユニバーサルデザインって何?(A県人権学習教材)」を横断的にカリキュラム・デザインしたサービス・ラーニング型PBL“Universal Design Contest 2020 in C Junior High School”での学びが生きている。この学習では、生徒が、美術科等での学びを生かしてユニバーサルデザイン製品を考案し、その製品の利点を英語で伝えるプレゼンテーションコンテストに臨んだ。また、生徒に対して、ユニバーサルデザインの精神はSDGsの「4.質の高い教育をみんなに」、「10.人や国の不平等をなくそう」、「11.住み続けられるまちづくりを」の実現につながるということへの気づきを促した。①の提案において、生徒が取り上げたピクトグラムを活用したゴミの分別方法は、上述した学習が統合され、「深い学び」へと発展した成果だと言える。

5.2. グローカル人材としての実践意欲及び態度の向上

表1は、サービス・ラーニング型PBLを取り入れたD Pride Projectに関する生徒の感想文(振り返り)である。

本学習の初期段階と比べて、生徒がSDGsと自分たちの生活との密接な関係性を意識するようになり、地域社会の課題を自分事として捉え、解決していこうとする意欲がうかがえる。また、生徒が郷土の良さを再認識し、それらを守り、次世代に受け継ごうとする意欲も向上し、持続可能な地域社会の形成者としての自

表1. D Pride Projectの生徒の感想文

<p>初めてSDGsを知ったときは、あまり実感の湧かないものだと思っていたが、今回の活動を通して、僕たちに深く関係のあるものだとわかり、解決していきたいと思った。そして、D町のよい所、好きな所を少しでも多く見つけられるきっかけになったと思う。それらを世界に広めていき、D町の魅力を知ってもらえるようD町を守りたい。</p>
<p>初めは、全然意識してなかったけれど、授業でSDGsについて考えたら、SDGsについて考えることはすごく大切で、それを行動に移していけたらいいなと思いました。D町には、たくさんのきれいな自然があるので、みんなが大切に思っている自然を壊してしまわないようにしていきたいです。そして、今、D町にある大切なものを次の世代に伝えて守っていけるような人になりたいです。</p>
<p>初めは、SDGsはそこまで大切なものだとは思っていませんでしたが、これから自分たちが生きていく上で絶対に達成しなければならないものだと思った。そして、ゴミがあると山や川・海などが汚染されていくので、ゴミのないきれいな町にして、それを保ち続けていきたい。</p>
<p>SDGsについての取り組みを始めは知らなかったけれど、大切なことだと思った。だから、積極的にクリーン作戦などの自然を守る活動に取り組んだりして、D町のよい所を守っていきたい。</p>

出典：著者作成

覚が高まりつつある。更に、行動面においても成果が現れた。生徒が、D町の美しい自然を守るための提案をまとめたフリーペーパーを自主的に作成し、地域住民に配布しにいくといった肯定的な変容があった。しかし一方で、地域だけでなく、世界のSDGsを実現しようとする意欲や地球市民としての意識を高めることが課題として挙げられる。この課題を解決するためには、GIGA(Global and Innovation Gateway for All)スクール構想による一人一台タブレットを活用して、ALTの故郷の生徒と協働してサービス・ラーニング型PBLに取り組ませることが有効であると考えられる。

6. 今後の課題

上述した成果と課題を踏まえて、今後も英語科の3つの資質・能力を育成・涵養するとともに、グローバル人材を育成することを目的に、サービス・ラーニング型PBLの活用方法について検証を続けていく。また、サービス・ラーニング型PBLが子どもたちに育むことができる資質・能力を綿密に分析し、評価方法についての研究を進める。そして、指導と評価の一体化を図り、子どもたちの主体的・対話的で深い学びを実現したい。

参考文献

- 倉本哲夫 (2008). 『アメリカにおけるカリキュラムマネジメントの研究 サービス・ラーニングの視点から』. ふくろう出版.
- 木村充・中原淳 (2012). 「サービス・ラーニングが学習成果に及ぼす効果に関する実証的研究—広島経済大学・興動館プロジェクトを事例として—」. 『日本教育工学会論文誌』. Vol.36(2), pp.69–80.
- 中里陽子・吉村裕子・津曲隆 (2015). 「サービスラーニングの高等教育における位置づけとその教育効果を促進する条件について」. 『アドミニストレーション』. Vol.22(1), pp.164–181.
- 溝上慎一・成田秀夫 (2016). 『アクティブラーニングとしてのPBLと探究的な学習』. 東信堂.
- 文部科学省 (2017). 『中学校学習指導要領解説 総則編』.
- 文部科学省 (2017). 『中学校学習指導要領解説 外国語編』.
- 金子朝子・松浦伸和 (2017). 『中学校新学習指導要領の展開外国語編』. 明治図書.
- Buck Institute for Education. (2015). PBL Works. Retrieved on September 24, 2021 from <https://www.pblworks.org/what-is-pbl>